

(1) なぜ僕は写真を撮るのか 2019年6月8日刊行

全盲の僕は、写真を撮る機会があまりない。過去に刊行した単著・編著では、自身が被写体となっている写真を掲載することが多かった。自撮りならぬ自撮られ写真を多用する僕だが、べつに自分好きというわけではない。触文化の豊かさを伝えるのが拙著の目的なので、僕が美術作品などに触れる写真はそれなりに説得力がある。拙著掲載の自撮られ写真は、年齢とともに変化（劣化）する僕の真の姿を写す記録として大切にすべきだと考えている。

デジカメが流布し始めたころ、自分専用のカメラを購入した。米国での在外研究に旅立つ直前ということで、アメリカでの異文化体験を写真の形で残したいという思いがあった。失敗したらすぐにデータ削除できるので、僕は気軽に撮影練習にいそしんだ。全盲者にも写真を撮ることができる事実、素直に興奮した。

最初のころは、なぜか友人の首から上がらないなど、「芸術的」な写真が多かった。でも、少し慣れると、コツがわかってくる。僕は被写体が発する声・音、時にはにおいに向かってシャッターを切る。手を伸ばして被写体を掴み取るイメージである。いつしか僕は、自分が撮る写真を「射真」と呼ぶようになった。受動的に写すのではなく、能動的に射る。今回の連載では、我が射真作品をいくつか紹介してみたい。

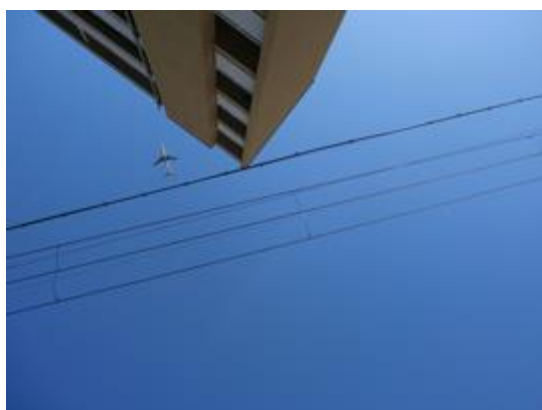


聴覚で被射体の位置・距離を推測する。「音に触れ、今日から僕も、撮り鉄に」＝大阪市内で2019年5月、筆者撮影

デジカメ購入後、しばらく僕は写真撮影を楽しんだ。しかし、徐々に写真から離れていく。その理由は二つある。第一に、撮るのはいいが、撮影後の写真を視覚的に確認できないこと。画像データをパソコンに保存すれば、全盲者が独力で撮影場所、日時などを整理できる。でも、パソコンは写真そのものの状況説明はしてくれない。自身の撮った写真の出来は、晴眼の友人・家族に判断してもらうことになる。せっかく撮っても、自分で確かめることができないなら、興味は半減してしまう。

第二の理由は、世間の「心眼」観念への疑問、反発である。近年、各地で視覚障害者の写真展が開催されている。写真を撮ることを楽しむ視覚障害者を否定するつもりはない。僕も、自分の写真が晴眼者に褒められると嬉しい。だが、自力で確認できない写真が作品として展示されることには、やはり抵抗がある。

視覚障害者の写真は、「心眼で撮る」と称される。心眼とは何だろう。ひねくれ者の僕は、「心に眼があるなら、苦労しないよ」と突っ込みを入れたくなる。厳しい言い方をすれば、心眼とは健常者が障害者を美化する際の決まり文句である。多数派の少数派に対する幻想ともいえる。僕の射真は聴覚や嗅覚を駆使して撮るもので、それは心眼などとは無縁だということを強調したい。



視覚を離れば死角がなくなる。「飛んで行け、レンズのぞかず、空を追う」＝大阪市内 2019 年 5 月、筆者撮影

(3) 写真がない時代 2019 年 6 月 22 日刊行

僕が射真という語を使うようになったのは、琵琶法師・瞽女など、盲目の芸能者との出会いがきっかけである。琵琶法師は音と声で、さまざまな口承文芸を創造した。彼らが視覚を使わずに、口から耳へと伝承してきたのが『平家物語』である。瞽女は三味線を持って全国を旅し、聴衆のリクエストに応じて多彩な唄を披露した。古来、盲人は文字を媒介としない語りの世界に生きていた。

琵琶法師や瞽女が活躍した中世・近世は、写真がない時代である。源平の合戦が終わり数十年過ぎれば、リアルタイムで戦闘を見た人はいなくなる。そんな時、音と声で源平合戦を鮮やかに再現したのが琵琶法師だった。彼らの語りには画像がない。しかし、その語りを聴く中・近世の民衆は「見たことがない風景」を自由に思い描くことができた。

瞽女は1970年代まで、新潟県下で活動していた。彼女たちは視覚を使わずに、自らの足で各地を歩くことで、目に見えない風景を感じていたのである。瞽女は聴覚・触覚、そして第六感で森羅万象をとらえていたともいえる。彼女たちが身体で獲得する風景の情報が、瞽女唄に独特の色彩を与えたのは間違いない。琵琶法師や瞽女の射真は語り物、唄の形で表現された。視覚優位の現代にあって、彼らが残した芸能は再評価されるべきではなかろうか。



「空気となって被射体をふわりと包み込む。「風を受け、心に描く、初夏の色」＝大阪府吹田市の万博記念公園で 2019 年 5 月、筆者撮影

(4) 射真展開催をめざして 2019 年 6 月 29 日刊行

現在、僕は射真展の企画に取り組んでいる。射真の特徴は次の二つである。まず、「写すのではなく射る」意識を持って、手を伸ばす感覚で事物の本質に迫ること。第二に、目で全体を見るのではなく、手・耳・鼻などで一点に集中すること。多くの人は写真で自己の体験を記録する。写真が有力なメディアであるのは確かだが、現代人の情報収集法があまりにも視覚に偏っていることに僕は疑問と不満を感じる。

琵琶法師や瞽女の芸能は、視覚に依拠しない射真の一例である。しかし、射真は視覚障害者の専売特許ではない。晴眼者も視覚中心の日常を離れ、聴覚や触覚の潜在力を引き出せば、ユニークな射真を創作できる。そこに、心眼などは必要ない。

7 月に第 1 回の射真ワークショップを行う。舞台は滋賀県の信楽。午前中は古い商店街、窯場など、信楽の街歩きを楽しむ。午後は、参加者各自が得た街の印象を粘土で立体作品にする。写真を撮る際は、自身と被写体の間に距離がある。一方、射真では事物に直接さわることを重視するので、被射体との物理的、精神的な距離がない。街との接触、街からの触発により、どんな作品が生まれるのか。多様な射真作品が集まれば、触れる観光マップができるだろう。さあ、射真展開催に向けて、暑い夏がやってくる！



目に見えぬ震動、波動を身体で受け止める。「うまい物、大阪人は、鼻で食う」＝大阪府豊中市内で 2019 年 5 月、筆者撮影